



マーケット・レター

インカム資産としての米国高配当株・REIT・MLPの魅力とは？

利回りの面で魅力高まる米国高配当資産(高配当株・REIT・MLP)

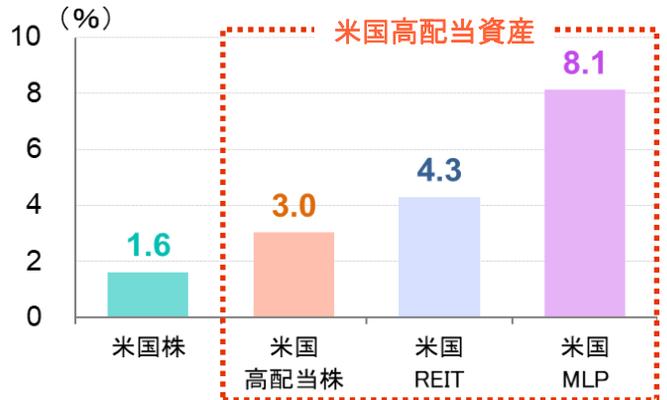
・米国の各資産の年間トータル・リターンを順位付けすると、2023年初来では主に大手ハイテク企業の株価上昇がけん引役となり、米国株が最も上昇しています。一方で、相場環境の変化により、各資産のパフォーマンスも変わるため、常に上位または常に下位という資産は存在せず、安定した配当(インカム)収益が期待される高配当資産(高配当株・REIT・MLP)を分散して保有することが有効であると考えられます(図1)。足元の米国高配当資産の配当利回りは、相対的に高い水準が維持されており、インカムの面からは米国高配当資産の投資魅力が増えています(図2)。

図1：米国の各資産の年間トータル・リターン

	2020年	2021年	2022年	2023年
1	米国株 (18.40%)	米国REIT (41.30%)	米国MLP (30.92%)	米国株 (18.73%)
2	米国高配当株 (2.06%)	米国MLP (40.17%)	米国高配当株 (-0.18%)	米国MLP (16.78%)
3	米国REIT (-5.12%)	米国株 (28.71%)	米国株 (-18.11%)	米国REIT (1.54%)
4	米国MLP (-28.69%)	米国高配当株 (25.85%)	米国REIT (-24.95%)	米国高配当株 (-0.84%)

(出所)ブルームバーグ (期間)2020年～2023年 ※2023年は8月末まで

図2：米国の各資産の利回り

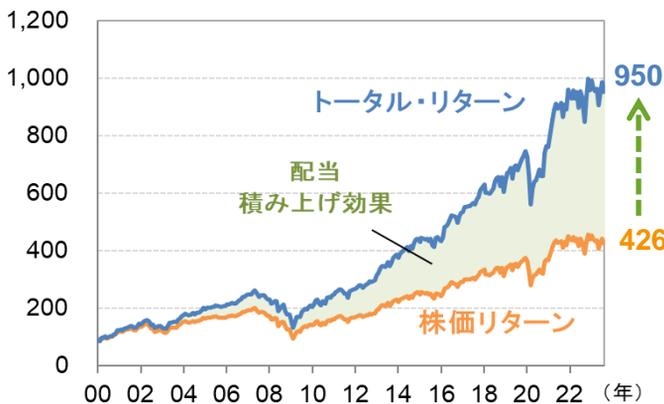


(出所)ブルームバーグ ※2023年8月末時点 ※12ヵ月先予想配当利回り

インカム収益の積み上げにより、米国高配当株は長期で安定したパフォーマンス

・米国高配当株は様々な危機を乗り越えて、長期的に上昇を続けています。パフォーマンスを要因分解すると、安定した配当(インカム)収益の積み上げがトータル・リターンの押し上げに寄与してきたことがわかります(図3)。また、米国高配当株は米国株全体(S&P500指数)と比較して堅調なパフォーマンスとなっています(図4)。

図3：米国高配当株のトータル・リターンと要因分解



(出所)ブルームバーグ (期間)2000年1月末～2023年8月末 ※1999年末を100として指数化

図4：米国高配当株と米国株のトータル・リターン比較



(出所)ブルームバーグ (期間)2000年1月末～2023年8月末 ※1999年末を100として指数化

※米国株：S&P500指数、米国高配当株：S&P高配当貴族指数、米国REIT：FTSE/NAREITオール・エクイティREIT指数、米国MLP：アリアンMLP指数

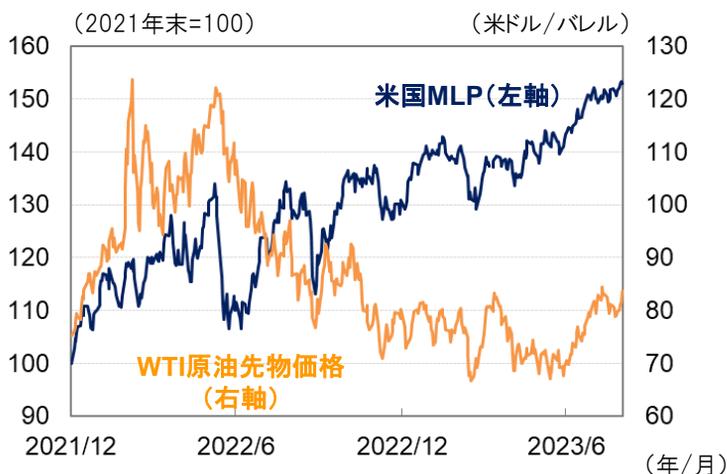
●当資料は、説明資料としてフランクリン・テンプレトン・ジャパン株式会社(以下「当社」)が作成した資料です。●当資料は、当社が各種データに基づいて作成したものです。その情報の確実性、完結性を保証するものではありません。●当資料に記載された過去の成績は、将来の成績を予測あるいは保証するものではありません。また記載されている見解、目標等は、将来の成果を保証するものではなく、また予告なく変更されることがあります。●この書面及びここに記載された情報・商品に関する権利は当社に帰属します。したがって、当社の書面による同意なくして、その全部もしくは一部を複製し又その他の方法で配布することはご遠慮ください。●当資料は情報提供を目的としてのみ作成されたもので、証券の売買の勧誘を目的としたものではありません。●フランクリン・テンプレトン・ジャパン株式会社(金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第417号)はフランクリン・リソース・インク傘下の資産運用会社です。



## 米国MLPは2022年以降、堅調な上昇が続く

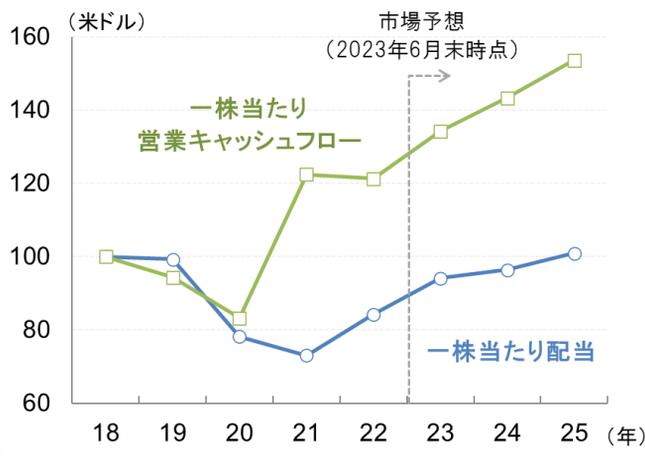
- 足元のMLPは高値圏で推移する一方で、WTI原油先物価格は今後の景気およびエネルギー需要見通しへの懸念から上値が重い展開が続いており、MLPと原油価格の連動性は低くなっています(図5)。米国MLPの配当は、2021年を底に増配基調に転じており、今後のキャッシュフロー改善に伴う増配の期待が高まっています(図6)。

図5:米国MLPのトータル・リターンと原油価格



(出所)ブルームバーグ (期間)2021年12月末～2023年8月末  
※米国MLPはアレリアンMLP指数

図6:米国MLPの一株当たり  
営業キャッシュフローと配当



(出所)ファクトセット (期間)2018年～2025年  
※米国MLPはアレリアンMLP指数

## 金利安定化により投資妙味が生まれる米国REIT

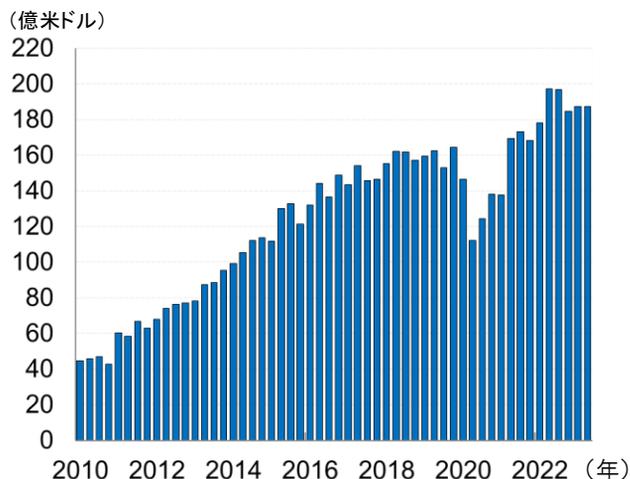
- 2022年初来の金利上昇を受けて、足元まで米国REITは軟調な展開となっています。米国における過度なインフレを巡る警戒感が和らぐなか、今後は長期金利の安定が見込まれ、金利サイクルの面ではREITの投資妙味が生まれる可能性が考えられます(図7)。ファンダメンタルズの観点からは、金利上昇や米金融機関を巡る不透明な相場環境においても、米国REITのキャッシュフロー(FFO)はコロナショック前の水準を大幅に上回っています(図8)。

図7:米国REITのトータル・リターンと  
米国10年国債利回り



(出所)ブルームバーグ (期間)2020年1月初～2023年8月末  
※米国REITはFTSE/NAREITオール・エクイティREIT指数 ※市場予想は2023年8月18日時点、2023年8月末以降は予測値。

図8:米国REITのキャッシュフロー(FFO)



(出所)全米REIT協会 (期間)2010年1-3月期～2023年4-6月期  
※FFO(Funds From Operation)はREITが保有不動産の運用から生み出すキャッシュフローを評価する指標。

●当資料は、説明資料としてフランクリン・テンプレトン・ジャパン株式会社(以下「当社」)が作成した資料です。●当資料は、当社が各種データに基づいて作成したものです。その情報の確実性、完結性を保証するものではありません。●当資料に記載された過去の成績は、将来の成績を予測あるいは保証するものではありません。また記載されている見解、目標等は、将来の成果を保証するものではなく、また予告なく変更されることがあります。●この書面及びここに記載された情報・商品に関する権利は当社に帰属します。したがって、当社の書面による同意なくして、その全部もしくは一部を複製し又その他の方法で配布することはご遠慮ください。●当資料は情報提供を目的としてのみ作成されたもので、証券の売買の勧誘を目的としたものではありません。●フランクリン・テンプレトン・ジャパン株式会社(金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第417号)はフランクリン・リソース・インク傘下の資産運用会社です。